

まず、次の文章を読んで何の儀式なのかわかりますか。

「テーブルにお祝のチーズや酒、月餅などを並べた後、長男のラドナー兄さんが親族を代表し、家の中央から垂れ下がっている蛍光灯のひもや、飾り物に、バターを塗った。」これは、モンゴルの結婚式の儀式である。上記に書いてある一つ一つの語句は、それぞれが日常的なものなので理解できると思う。しかし、日本という文化・風俗・習慣等の中で生まれ育った私たちは、モンゴルの結婚式に関する知識がなければ、上記は何の儀式かわからないだろう。

ところで、読むという行為はどのようなものか。書き手である著者のメッセージが、読み手である読者に自動的に伝わるものなのだろうか。誰もが、読んだものが難しすぎてほとんど理解できなかつたり、ベストセラーの小説を読んでも感動し面白いとは思えない経験をしていると思う。このことから、著者のメッセージが自動的に読者に伝わるものではないことがわかるだろう。

ではなぜこのようなことが起きるのだろうか。その答えの一つがスキーマ(schema)という考えである。スキーマとは、「長期記憶内に貯えられている総称的概念(genetic concepts)の表現であって、われわれが日常的に経験する事物、状況、出来事、活動、あるいはその連続、などの理解はこのスキーマを何らかの形で利用している。」(天満美智子著「英文読解のストラトジー」)である。つまりスキーマとは人それぞれが持っている知識の総合といっても良いと思う。だから、ある本を読んで理解できればその本を理解できる十分なスキーマを持っていたことになる。

私は、読むという行為は自分が試されることだと考える。あるものを読んで理解できなければ、それを理解できるだけのスキーマが自分にはないからである。つまり勉強不足・知識不足・経験不足が明らかになるからである。

先日、約40年振りに中村雄二郎著の「哲学の現在」と「術語集」を読んでみた。相変わらず難しすぎてよく理解できなかった。10代のころの理解とあまり変わらないのでは、と思ってしまった。40年経っても私のスキーマは豊かになっていなかったのではなかろうか。まだまだ勉強不足の自分を恥じている。